

『ギヤスケル論集』誕生を祝って

山 脇 百合子

日本ギヤスケル協会の論文誌『ギヤスケル論集』が刊行されることになった。昨年12月15日の幹事会で、創立以来三年になる私たちの会で、そろそろ論文集を出したらという声が上がった。ふり返って見ると、わづか三年の間に、ギヤスケル夫人の作品に多方面から光をあてられたすぐれた研究が数多く発表され、それらの論文を中心に会の歩みは加速度的に発展してきた。

今や、ギヤスケル夫人は、ヴクトリア朝のトップを飾る作家として重要な地位を占めている。同時代の他の一流の作家たちより研究が本意にもはるかにおくれて、国際文学界で不遇の立場におかれていたギヤスケル夫人の真価は、過去20数年の間に急速に再評価の作業が行なわれてきた。

英国では1985年にギヤスケル夫人ゆかりの地ナットフォードでギヤスケル協会が設立され、その後研究は着実な歩みをつけている。

1987年創立二年後に研究論文集『ギヤスケル・ソサイエティ・ジャーナル』(The Gaskell Society Journal)が発刊され、マンチェスター大学に編集事務局をおいて毎年1回出版されている。編集責任者はマンチェスター大学文学部講師アラン・シエルストン氏である。オレンジ・緑・黄色・紫・ブルーと毎号表紙の色を変えて、ギヤスケル夫人の作品からの挿絵^{かし}をプリントした美しい装丁である。

送られてくる英国の研究誌『ジャーナル』はいつも世界的に著名なギヤスケル研究家の論文が数々掲載されており、最新の英本国での活発なギヤスケル研究に接することができるので、日本のギヤスケル研究家たちには大変な刺激になっている。

ギヤスケル研究の第一戦で現在英国で活躍しておられる国際学者たち、Arthur Pollard教授、Chapple教授、Enid Duthie 女史、Patsy Stoneman 女史、Edgar Wright教授、Wendy Craik 博士らの『ジャーナル』のために新しく書かれた

論文がつぎつぎに『ジャーナル』にのせられている事実は、ギヤスケルの研究が大変な勢いでいま、英文学界に広がって行なわれていることを明らかに示している。

ところで、私たちの協会で今回誕生した『ギヤスケル論集』は、多くのすぐれた日本のギヤスケル研究の宝庫である。日本の真摯なギヤスケル研究家たちの論文が、これほど多く短い期間に発表されたということは驚異的な事実である。

ギヤスケルの作品は、さきに述べたように、一流作家として研究されることがおくれたために、作品の邦訳も少なく、『克蘭フォード』（小池滋訳）、『シャーロット・ブロンテ伝』（和知誠之助訳）以外現在手近に入手出来る訳書はないといってよい。代表作『メアリ・バートン』、また傑作作品『従妹フィリス』の訳もとくに絶版で、ギヤスケルの作品は日本の一般読者には殆んど知られる機会がないのである。それにもかかわらず、日本ギヤスケル協会が誕生してわずか三年たらずの間にこれほど多くの研究発表がなされたということは、以前からかくれたギヤスケル愛好家が多くいたということをも物語っている。あるいはギヤスケル愛好熱は日本人の間に潜在的に以前から根づよいひろがりをもっていたのかも知れないと思われる。

私たちの『ギヤスケル論集』が、これからギヤスケル夫人研究の見ごとな花々をつぎつぎに咲かせて行く土壌になることを思うとき、協会としてこれほど喜ばしいことはないと思う。また、昨年日本ギヤスケル協会で行われたArthur Pollard教授の講演の草稿を頂くことができ、私たちの『論集』第一号を飾ることのできたことはこの上ない幸せである。Pollard教授の新しく発表された研究として貴重な意義をもつものである。

これまでも、日本ギヤスケル協会の設立以来、研究発表の要旨、会の動向、ニュースなどを載せた「ニューズレター」(NEWSLETTER)が年に1回刊行され、唯一の会の情報機関誌として会員に親しまれてきている。「ニューズレター」とともに『ギヤスケル論集』が平行して発刊されることになったのだから、ここに私たちの会の着実な歩みの結実をみることになった。

「ニューズレター」は協会幹事久永東輝氏が編集責任者として手腕を見せて下さっているが、今度誕生した『ギヤスケル論集』は協会幹事沢井勇教授が編集責任者としてご尽力下さることになった。簡潔で明快な誌名『ギヤスケル論集』の名付け親も沢井氏である。日本ギヤスケル協会創立以来、会の中心となって活躍しておられる沢井、久永両幹事に深甚の感謝を捧げ、同時に新らしく刊行された『ギヤスケル論集』が発展することを祈る。